教区新報

第11号

発行
浄土真宗本願寺派
兵庫教区教務所
〒650
神戸市中央区下山手通8丁目
1番1号　本願寺神戸別院内
電話（078）341―5949

教団が目ざすものと　教団に求められるもの

宗門発展十二ケ年計画も一応の成果を得て残り僅かになり、現在は基幹運動の推進を柱として、二つのスローガン即ち『念仏の声を世界に子や孫に』と『御同朋の社会をめざして』を掲げて一歩一歩教団は動いていることになっています。

その中でも特に『門徒推進員養成のための連続研修会』（略して連研）は第五期を修了する過程のなかで数多くの課題を山積みしながらも、一方では習俗迷信などの問題点を提起してきました。時々耳にすることですが連研ほど長続きしている事業は未だかつて教団にはなかったと言われる声もあります。その理由としては僧侶の体質として継続して同じ目標に向かって組織的に取りくむことが困難な状況を自らが設定してしまう事に慣れきってしまっている処に原因があるとも考えたくなります。従来、連研は門信徒会運動、同朋運動の推進の中心的な主軸としての役割を果してきましたが、裏を返せば僧俗共に同一の場で学び合い聞き合うことがなかったとも言えます。今後長期にわたって連研が継続して行われ、それに伴って起りうる課題の一つひとつの解決策を改めて僧俗が見いだす必要性が望まれるところであります。

『寺がかわった』『僧侶がかわった』という声もないわけではありませんが、肝心な事は僧侶自身にかわっていくことの危機感のようなものが内在していることも否定できない既成の事実であり、その克服が先決かも知れません。具体的な事象を挙げることは別にしても僧侶の現実の生活にメスを入れなければ膿（うみ）というか問題点は指摘されにくく逆にそれらを覆い隠すことが日常茶飯事に多く存在しているとも考えられます。

外的要因というのか社会の流れの中から教団に対しては生命科学、体外受精、脳死、遺伝子工学、高齢者問題など次々と投げかけられる多くの問題に対して、例えばビハーラ活動として方向づけを見いだすことも可能ですが、一方内的要因というのか教団、寺、僧侶が内包してきた問題、世襲制、寺檀関係、法人税、僧班寺班、組画以後の法中付きあい等いずれをとってもかなり時間と思考が要求されるものばかりです。教団は教団なりに、寺は寺なりに、僧侶は僧侶なりに解決の糸口を見いだそうと努力していますと声を大にして叫んでみても残念ながらその響きは一般大衆には届いていないのでしょう。

教化の現場が寺とだけ考える僧侶もかなりあるのでしょうが、発想の転換というのか余程の思い切りを一人ひとりが実行することが解決への糸口と思います。

赤穂北組　浄蓮寺　増井浄見

御同朋の社会をめざして⑭

出石組正福寺　山崎一朗

『いや、むちゃでのうて本気でそう考えているようやで』

『なんでこんなことになりましてん』

『そうやな中曽根さんて人いやはったわな。あの人の言い前が「戦後政治の総決算」と「トップ・ダウン方式」やったわな。言い前は新しいが要するに上意下達、天下りちうことやろ。もう民主主義は終わりましてん、国のやることについて来いなちゅうこっちゃ、部落問題についていえばこれからはこの問題の解決は国がやりまっさかいな解放運動団体口出しせんとくれやすということやな』

『へえ、たいしたもんでんな』

『そうよ、たいしたことやで、これは。あの水平社ができたとき「部落民自身の行動によって絶対の解放を期す」って差別行為に対して糾弾を決議したわな。差別があり、その差別に対する解放運動があるかぎり糾弾はありつづけるわけや。いうなら生命線みたいなもんや。ところがこれからは国がやりまっさかいとなった今、糾弾は人権蹂躙の犯罪行為扱いされるわけやな。これは過去六六年にわたる水平社以来の解放運動の歴史を全面的に否定したということになる。これはたいしたことやで』

『でも、ご院さん、それ解放運動そのもんを否定したわけやおまへんやろ、やり方が悪いちゅうわけで』

『あんた、マラソン選手にとって走るのは命やで、マラソンは悪うないが、走るのはやめなはれ言えるか』

『そらまあそうでんな』

『そういうこと。とにかくこれからは国がやりまっさかいて行きかたやな。そうなると

（1）国は断固たる主体性を常に保持する。

（2）地方公共団体は民間運動団体との対応に心腐らせているみたいやから、国が積極的に指導助言する。

と、まあこうなるな』

『へえ、地方公共団体もえらいなめられたもんですな。おまえらのやること見てられへんてことでっしゃろ』

『それから次ぎにやな。

（3）えせ同和行為に対しては企業や行政機関が不当な要求は拒否し、警察当局に通報する。

ここでいよいよ警察が出てくるんやな。

（4）差別事件が起きたときは司法機関や法務局の人権擁護機関に処理をゆだねる。

それが憲法精神に則った行為ちゅうこっちゃ。』

『あほくさ。わてら法務局やの人権擁護機関やのどこにあるか知りまへんけど、人権擁護委員ちゅう表札かけた家は見ますわな、あそこに行ってこれこれしかじかの差別事件が起きましたて言いますのか、そしてそれは解放運動団体の行き過ぎと同和関係者の自立、向上の精神が欠けとるからだてな返事貰って帰って来ますのか。よしとくんなはれって言いたいわ。それで、解放運動団体はそんなら何しますんや』

『解放運動団体て言葉はないな。民間運動団体やな。これはさっきあんたが言うた自立、向上の精神の啓発推進にあたるてとこやな』

『へえ』

『要するに部落の人間は自分で生きて行こうという気構え、自分たちの生活をより良くしようという心に欠けているからそれを持つよう精神修養させるのが運動団体の任務というわけ、そう書いてあるな』

『ご院さん、さっきからわてなその自立とか向上とかいう言葉な、どうもひっかかりますんや。部落の人間は自分で生きて行こうという気構え、自分達の生活をより向上させようという心が欠けているなんてことどこを押さえて言えますんや。そりゃそういう自立、向上心を押さえつけたり、奪い取るような国や社会の条件はたんとおましたで。その中でも部落の人間はなんとか自分の力で生きよう、この生活を良うしようと必死できたと思いますんや。

そんならなんですんか、今までやってきた同和対策事業てのは「お前らほんまに困るやんか、自立心も向上心もあらへん。それで国がこんな環境改善事業なんかせんならんことになったんやで、しゃんとしいな。さあ、ここまでしてやったんやから後はちょっとは自分でやってみたらどうや。いつまでも甘えてたらひどいで。」てことなんですんか。それなら「してやっている」という恩きせ根性見え見えですわな。そしたら当然「向こうがしてもらうなら、こっちもしてもらおやないか」と逆差別感もうまれまっせ。問題はする側の姿勢でっせ。

いずれその文章とやらも、えらい大学を優等で出た人が集まって決めて書いたもんでっしゃろ。ええこと書いてあるんでしょうが、お腹の中冷たい人ばっかりでっせ』

門徒推進員

自分を返り見て

子の幸を願わない親は一人もいない様に、仏様の願いの中にいない人は、一人もいない、とその教えも知らず、人に負けない様に背のびして、生活の豊かさばかり夢見て暮しておりました。お寺にお参りしてはただ何もわからないまゝ、又わかろうともしないで手を合せておりました。その様な私に、御住職より連研に行かれませんかとお誘いを受け連研に参加させて頂き二年後には中央教修も受講する事が出来、それよりお寺にて度重なる御法座に遇わせて頂き、又お寺の行事にも参加する度毎に、お聖人様の御縁に触れさせて頂き、そうして、如来様の本願と言う尊いほとけ心のお出遇いの安らぎの中で、念仏の行者としてもろもろの雑行を捨てなければいけないと言う事を知らされ、過去、現在、未来とつづく流れの中で此の世に生を受けた事を感謝させて頂くと共に、今生かされている命の尊さを喜ばさせて頂き、日々を報恩の気持で送る身にならせて頂きました。そうしてみ光に照らされて、自分の身の罪の深さを知らされました。お念仏は、にごりを縁として咲いて下さるはすの花とか、何時か大乗で読んだ事がございます。今にして思えばご住職のお誘いがなかったならば、今日の生活の上にみ教えを正しくふまえて、往生浄土の道を力強く歩む事は出来なかったでしょう。目覚めさせて頂いた私、それぞれの研修会でのご講師のお話、又その場での同じ道を歩んでいる方々との良きお出遇を自分の財産と致しまして、体験を実践にうつし空論に終る事なく、もったいない、おかげさまと言う環境のもとで生活し、めぐまれた家の庭先で、四季折りおりの花を作って咲いた花を言葉をおかけしながら仏華としてお荘厳させて頂き、その美しい花を私の心にもいっぱい咲かせようと思っております。そうして本願を究極の依りどころとして生きられた親鸞聖人のみあとをおしたいして、一人でも多くの方にお念仏を伝えて参りたいと、一生懸命頑張っております、推進員としては、連研の受付などのお手伝いをさせて頂き、月一回お寺にて仏婦の方と共に集り勤行、讃歌、作法などを勉強年に一度、念仏奉仕団として参加させて頂いております。

合掌

揖竜東組源徳寺　福島　佐津喜

組の活動

新宮組は、先般の組画変更によって、旧佐用組の新宮町内九ケ寺、旧揖東組の新宮町内六ケ寺併せて十五ケ寺で以って組画されました。

流れも形態も違う組の中から合流した十五ケ寺であったためか、最初のうちは事業へ取り組む姿勢考え方等で、少々ぎくしゃくした事もありましたが、新宮町という一つの行政区域内であることと、昔から新宮仏教会の一員としての繋りのあることが、新組発足といいながら、地縁といいますか何か言葉では言い表わせない連帯感が、組内各寺の感覚の中にあるように思われる今日このごろです。

新宮組が、発足して先ず最初に取り組んだのは組連研の実施でした。

隔月、第二土曜日実施と決め、カリキュラムの作成に取りかかり、僧俗共にみ教えに学ぶ、共に手を携えての研修だということで、組内住職の内から、講義担当三名、勤式作法担当三名でもってスタートしました。

組長の指揮のもと、担当者ならびに各寺住職の強力なバックアップのおかげでこの三月修了式を済まさせて頂きました。当初参加申込み者数五十三名、終了証書公布者数二十九名の実績でした。

修了時のアンケートによりますと、講義の内容が少し難しかったようです。しかし修了者も再度参加しても良い、また、もっと聞法、学習を続けていきたいとの解答が二十数名あったのは何とも心強く、この五月から始まる次期連研には、研修生の皆さんに、み教えが少しでも理解して頂けるように鋭意努力しなければと思っています。

また、新宮組寺族婦人会は、年二回の研修会を持ち、お法りを聞きながら、お互いの絆を深めあっています。

組の仏教婦人連盟は、昭和六十二年八月二十一日に、組内住職、寺族婦人会、総代会参会の内、足利孝之先生をお招きし盛大な発会式を執り行い、今年度は、現在の仏婦登録数七ケ寺（組画当初五ケ寺）が、一ケ寺でも増えるよう夏期仏婦大会を実施し仏婦結成の呼び掛けを行なって行く予定であります。

新宮組は、これからご門主の組巡教も取り組まねばならず、何から何まで、暗中模索の内、教区内各組の皆さんのご指導と、組内各寺の協力を仰いでぼつぼつと歩かせて頂けたらと念願致しております。

新宮組相談員　赤松　義誼

（背崎　明源寺）

メモ

○いのちの尊厳と現実社会を問題にしてみ教えに生きよう

（同和問題をはじめとする差別問題への積極的取り組み）

教団における差別事象とその原因の究明をし、その解決にむけて全力をあげて取り組む。そのため教団のあらゆる組織が、自らの体質を改める学びと実践をする。社会における同和問題をはじめとする差別の問題に積極的に取り組む。

（基幹運動本部活動内容より）

伝道

恭敬の心に執持して　弥陀の名号称すべし

一月十五日の出会い

今年の一月十五日に、御本山の御正忌報恩講に例年の様に御門徒の方々と団体参拝を致しました。本山前の宿に着き、夕食を頂いてから、御門徒の皆さんを総会所に案内しました。しばらくして大学時代の旧友が近くの東急ホテルに泊っているので、出会いに宿を出た時の事です。御本山の大門の前を通りかけると、黒い影が二つ、閉っている門の前で動くのです。あたりは、もうすっかり暮れていました。

私は、一瞬びっくりして立ち止って様子をうかがいました。

すると、おばあさんが石畳の上に正座をして、閉っている門の外から、二回、三回とお礼をくり返しているではありませんか。そばには、若い御婦人が立っていっしょにお礼をしていました。おそらく、お孫さんか、お孫さんに嫁ついできたお嫁さんでしょう。私も、おもわず、二人の後から手を合わせておりました。このおばあさんが、どのような思いで手を合わせていたか私にはわかりません。

しかし、口先ばかりで信心〳〵と言っている私には、自分の足りない面をあらためて知らされました。宗祖の高僧和讃の一部『恭敬の心に執持して、弥陀の名号称すべし』この御文が頭の中を走り回りました。恭敬とは、お敬いであり御信心のことです。執持とは頂く、宗祖は持とは不散不失、つまり、どこにもいかないし、なくさないとお示し下さっています。自分で作り上げたものは、いつかどこかでなくします。良い心もいつしか愚痴の心になっております。南無阿弥陀仏の名号だけが、私と一体になって、いつでもどこでも働いて下さいます。

頭も身体も、わが身全体で味わう信心でなければならないと改めて知らされました。

おばあさん、娘さんありがとう。

多可組正福寺住職

宝池　龍祥

（モダン寺テレホン法話より）